道中膝栗毛續三編

上冊

へ13
1164
53

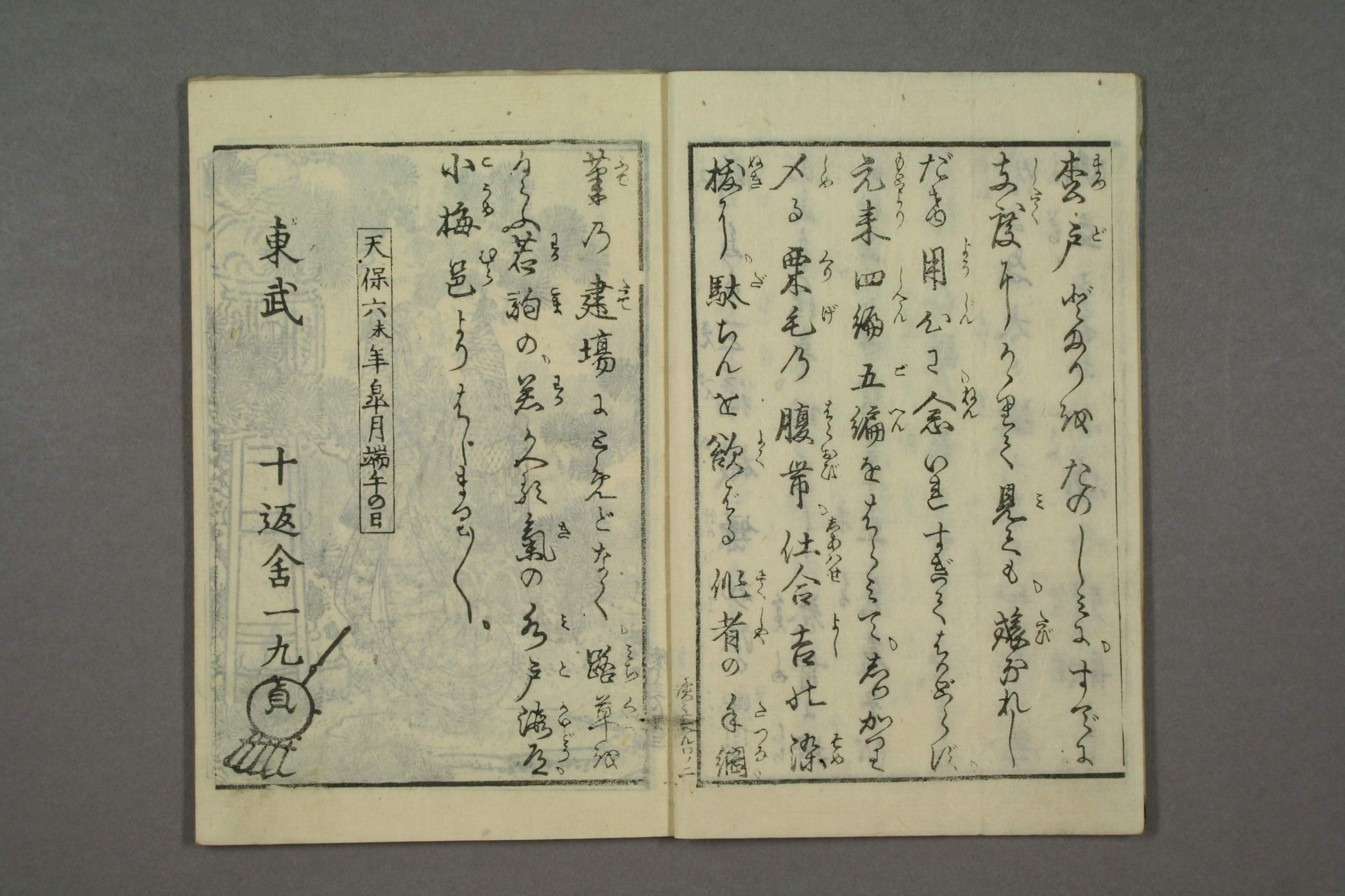
へ13
1164
53

膝栗毛續編序

おもふに東海道の初編世に流行
すること久しく人口に膾炙
一河を許らざる人乃戯作
詠れば古歌に
関を女繻毛の續編

其二編より今ハ其二十有余の
篇数かきて祝ふ御音宮にいの事ハ
人まぐること駆元兵龍を待寶八り
欲の果もなく續き輯海ぐ跡を引
上戸の元氣より おごて うるまちく 倶に

醉ふる三編機嫌初篇の四冊の
おもしろさ 巻首ハ 堺
あけふ まさ 宮うまき立 表 表 ぶ
かく 孫く 外題ハ 苦 ゆせ うどぶ
催 太く 講 おまぞ おまの 廉
鳴 立 ちわか 小 梅乃 引 船 ら

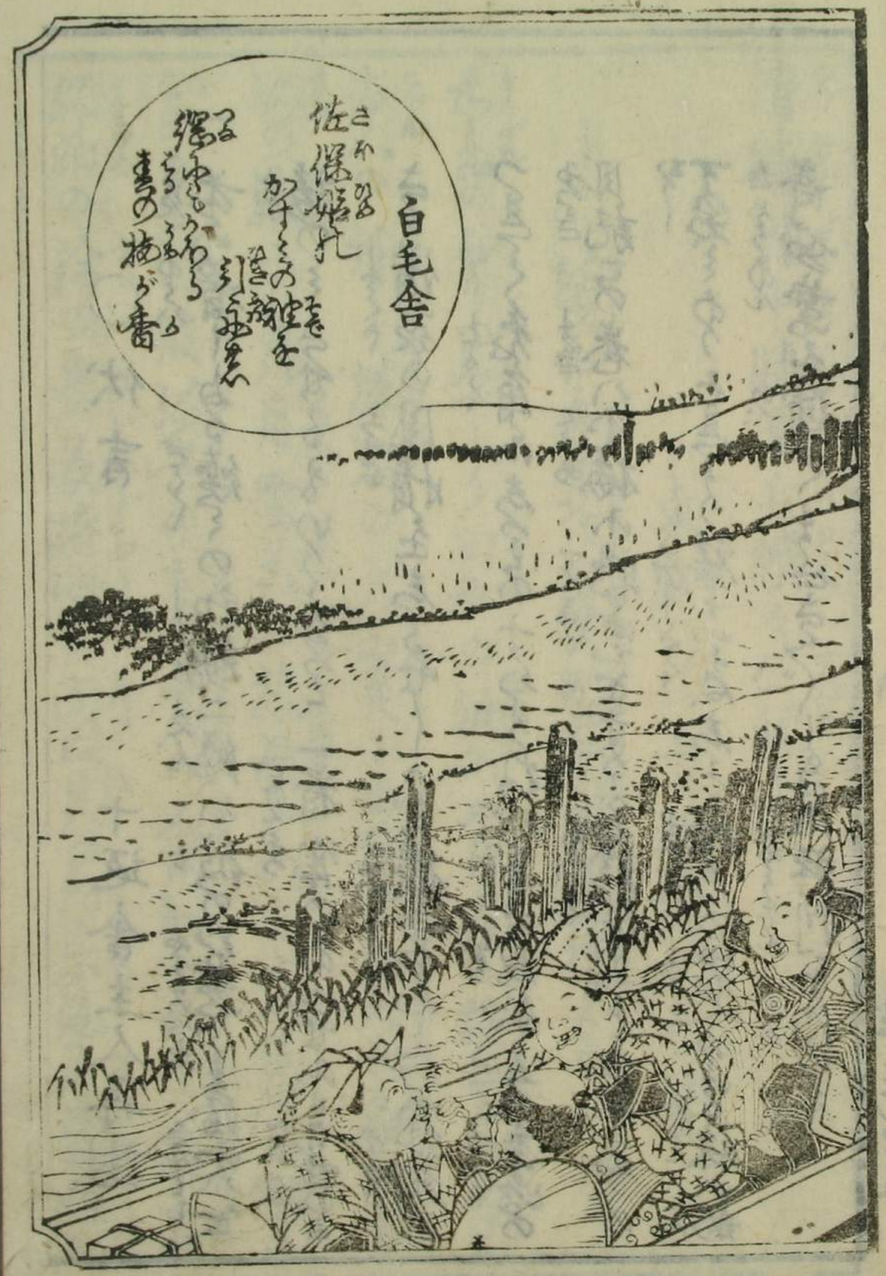


蛮戸ぜんりう紙なのしをすでよ
ちゝ度ゝりうまゝ見ても嬉かれし
だゞ開ゐこ念のまゝすぐゝちぐゝば
元来四編五編をちゝて高かつて
人る栗毛乃腹帯仕合吉北深
桜ゝ駄ちんを欲ゝる他者の手綱

葉乃建場よりちんどなゝく路草紙
ゝゝ若詢の差ゝ新氣のゝ戸滿足
小梅邑ゝゝ。

天保六未年皐月端午の日

別荘
庭の
景
八橋舍
主人


白毛舎
佐保姫
かすみの衣を
引そめて
緑ゆたかなる
春の柳の糸

酒さかな
小梅
引そめて
景色

○伏言　十返舎主人再誌

一　未ふ著しあるゑくの初編二編ハ彼の[illegible]ハ
旅のゝさまるもいつぐるとゝ着宮のあゝ世ふまう世ハ
さろ備家の風情を志るゝ世〜ゝ〜ゝ旅雪もとゝの外題ふ
つゝ且ゝく兎角ふ志るゝの寸ゝゝゝわゝばまゝゝ男ハゝゝ孫婦の
貝紀この巻ハ小梅ふ物完せるゝ端ふゝく色さゝゝぐの
下ゝゝゝゝゝゝゝゝ旅ゝゝゝ松戸の宿人のゝる旅ふ新
奇妙業を述ゝくゝゝゝゝ評判を伝のゝ

滑稽道中膝栗毛續々三編上

東武　十返舎一九著

○[illegible]北八小梅の別荘ふ滑稽貴紙つゝを
[illegible]の[illegible]ゝ出女の袖ふ[illegible]る[illegible]男のうげを
古人の旅〜旅宿の月賞ふ学の中の人[illegible]
旅の旅ゝゝゝ八月雪花も旅清ふのゝうゝゝ[illegible]の
ゝゝゝゝど彼[illegible]ゝ湯ふ八人ふ新ゝゝ〜旅雀
[illegible]の[illegible]の音長持唄を同ぬ見八白紙東海ふ賞塔も

目出度かりける如月や久しぶりなる江戸の春静けき
御代のためしにゆたかに仕事に仕業見る
氣もおのづと急に角慮勝生質優長なりて
上戸の癖にみなまけたる三度の食を三所で喰ふ氣
まんじの猿の空また今さらにおもありくなれども
此節稽古と重荷に小附の豬ちん馬ひくにひかれぬ
危妙の果しもつきざ坊主にまであたまもおろしき視
雛にとまくなる借家住途方にくれし娘の風

身にあまくとよびしげなる折から表口にみえし
料理家の女房娘と見えたる十六七の嶋田の娘弥
次が住居の宅とさし覗きて 女「ハイチト御免なされませ
弥次さん北さんとおつしやりますのおかたハお内でござりま
すか 北「アイとちらでござりますやらが今畄守でござります
やらまてとも借金取が表ハ出て往さ来りまうすんで
あげや甘がてアおまへハ何だかう来まさアて 女「ハイ本
戸隱の福本でござりますがちよつとさとへおめにかゝる

二階のお客が弥次郎兵衛といへる者なり
うちに居中と来て今まで「ハラナ
おの人の所望でもあるまじ豆のえ ★「イエ左程でハなど
あるまいせんモウ六十七八の老婆
小刺を持て来て御揮ひ物もあるまじ
金銭宜ところの大風呂敷さあといへ風俗のおかでごろる
まづトのハなて弥次郎兵衛どもの
為ることなるけまづいろくと思案をしく見るに二面の

宜き人と関こふ
国あるく娘ふむろひ 弥「モシ姉さんその格好でハ駄目
大ぶるまさそうぶ
ぶるれ人ノ 女「ナニ遠ひハいさまもまのうんでも
久しく藤ふだろうと出くわ知るまつく生涯出世の時
あるこうこうこうこう山八さんとの人お方が食害ふおそうこうる
お宅ごと義川く来ぶまーとトいつを笑ふ山八ハ
何の出ぞうの早合点弥次郎兵衛を押退て「ハ

そもそもごぜやうの姉さんその工面のよきそつるあ宮ハあれうと着衣の仕しまどをきる乳道具のお人ごらうたしこふおもゝを呼ふよしるこゝろつゝふ遠ひハあひうんでも先年初のきよしてくごきうつさお宮ごらうエコウ弘法さんちゝさいつく貧ハかつく来るぜ花をのらッて来くあめゆもれちそうをするうら花ゝく居ゐせんやゝあとゞて人まつし家業を勤く盛つの時ふふ遠ふ見ハ

飯ゝしのトのひうゞゝ中人ハすとしのきゝ月のこゝ逢ニ
来ゝ娘ハあきこし顔色 女イエ姉さんでハどざゐ
まにまの見物ゝあゝしやゝ食宮の小ハ色ひ
者ゞ居ゐごらんゝうちのお方中人初ひよゝ弱ふ
きゝ清さんだゝりお母やて来くゝ見ゝとあゝしやんまゝこ
トのゝバ弱居ゝハ笑ひ中しア八ゝゝ之見ゝごく業
きゝしゝめん仏でも来ゝ来ゝ砂を入きゝアゞ長の乃中
砂をゝくのを仕ごをゐひの絶ゝふ中ごゝゝて生ゝこ

雪の
人をつくり
喜ぶ
笑ふを
みるまくの
妻うえ
三月倉

癖ふまぐとうまも志れんぐあ実のこうこの男ご「そく伝の
ふ人だろう　好男の振を志ようと思ひて乃中ぐ女と狂
で幾度和をうあること思ふ人んなあめぐが志くじつこのご
そしてうあんまつと芝居のれんとをいくみさんなを今弧
ひろ志勝ハ留をぐとりつこじゃりれんうをあ振をだろう
ろう　姉さんあ人帰りく志ぬてこんなアり弧ふ
志勝ハ他人　ぎまして留をぐ正マア表向ハ左狂ヤ〜志
ぐ実ハ与せつみ千戈ふる娘と情合ご信濃の方へ

ふ嘉をいて〜　まく〜こうく　四ハ山ハとの人実舞を見てみが
ぬ事をを引請く　屋ますくうく　小ハ人へどつぞあ狐ひやまたト
志狂いつくうんを世人　孫へ　他をそれひる狂があらア　ぐう
ぐうあエそ〜くるノみ十ふる娘ふハ人んのうぐごうく〜れ人
めく言やうをする男ご　北へハ〜〜　九十和上ちた志ふ
人のひりちづよろつづ十九ふる娘がお人の相を志ぬ
そ人こもするめうだろく〜山押のつ志〜もあどづあ〜ア
ノウ姉さん　行つこうくぬ志ろを関くあのうつも行と

いつぐさまを多く門ホイそあつけるがたそ〜多けまつで
ぎまろしく　女八イ左衛門そのちう帰りへまもう
ト出く内けば紙屋ぶ三郎が知れど金盥の男郎と
関くこのりくごろく小八を此つけ被福本人を
引〜しがその男郎といふ紙屋ぶ三郎が親方の叔父ホく
少琴屋富吉といふ着うて先ところ紙屋ぶ三郎小八が
神田の八丁堀を志ひ旅宿の付分八損元だりつぎ
為今ありこのこのこ〜ところ仕郎ホ金きつけ

あつそその上富ホあつこを移も知れず地面家処ぶを
のあそ三流る身の上を多こけまこども実子多けまで
ぶだちく物の紙屋ぶ三郎が胴楽ホくちも旅あるを手
する仕業〜居ろしが小紙の帰を受こぎくしろれ
来うまちのち第多引うけ信切ホ世話を多〜ホ絵
女房多持く身を保つりの多くあ主ま〜ようく
相談の人彼尼ホ対の女房八金をつけて他人縁付
ま仕ままでの古借金をのちこと今をのちこぶ手

付くぬハたるとハ捨られぬ義理もあつてをいハゆる當
世の方へ両個とも引取しゞまゞ元をつゝハ〳〵うゝも
幸抱すぬゞき風情なたるとて幸ひ小梅ハ別座敷
のとゝめとなれバ弘次ふ主膳ぬハの二人をその賓客の者
人ゞ出羽させまゞ拍子の雅遊の宴酒の相談お
てをとの人酒盛をたゞらとせ吉原ゞ姫人白き當世の風
流拍子ハ知も角も今のところハすのぶんゝ
すこしも元まゞ出来ぬハまゝ

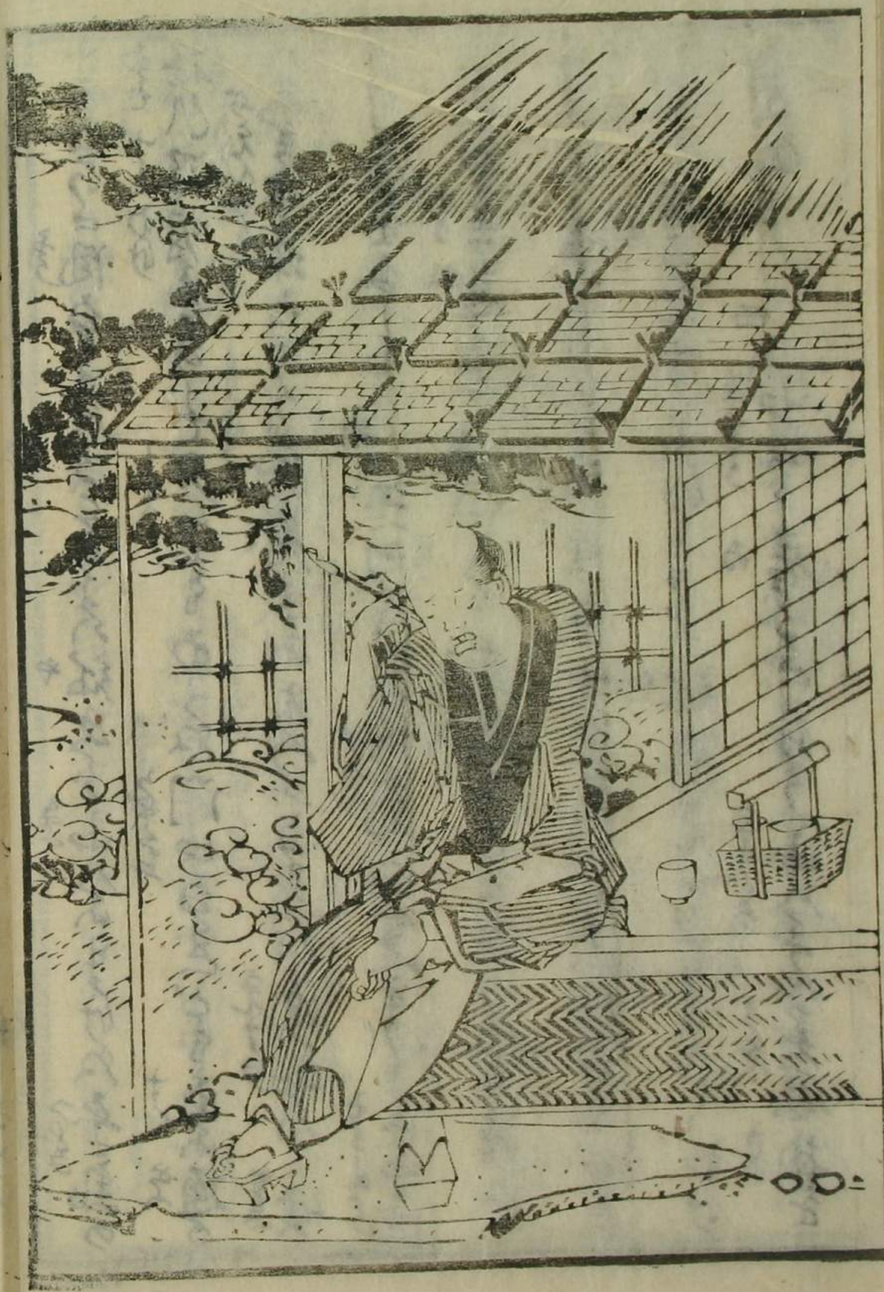
のこしてつゝハ〳〵ぐとうゐ所人ゞのぎくまでゆくのこゝ
叔父の子間ゐ弘次ぬハまく付ゐる小梅の
別座二人ともハ身ゞゐ早く出来引移りまゞ
風雅なゐゐ所ゐ元来風ハ御しゐ氣の
出来ぬ遊ハ方ゐ出来まくゐ名取
ゐゞ〳〵ぐゐくおゐしきとゐ〳〵ゐ遠方ゐ寄ね
来る人もゐと風氣ゐ〳〵ゐ御けゐ者の拍ぶ所と
賑ゞ叔父の苦労ハゐ西ゐ

鈔八ヶ月ごと元氣にて新文を見をかくる両
国の奥にてなのしけ且さそもあづけき太平の
御代の恵のあとがきくもあ[illegible]ぞれ民の門をふる[illegible]
紙[illegible]八八頭[illegible]の氣[illegible]んじふあづる家を拔
ぐらふ[illegible]人ゆたびふ[illegible]る南[illegible]を初[illegible]で[illegible]
人間ごとの雑楽連中[illegible]けて雑沢と新[illegible]
南助西[illegible]東[illegible]ぐく[illegible]言[illegible]番ふ[illegible]
役者[illegible]ゆたび芝居通[illegible]

するきの[illegible]風[illegible]ふ八ふ[illegible]紙[illegible]ふ山八ふ[illegible]平氣の
[illegible]ぶ好明[illegible]メ[illegible]門[illegible]
八ふ[illegible]ぶ見[illegible]ぶ南助八[illegible]
[illegible]

南「エヘン〳〵ハイ[illegible]兎[illegible]人[illegible]〳〵[illegible]通
[illegible]子 東「ナニ〳〵[illegible]
[illegible]通[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
西「[illegible]
[illegible]

深川花耕



持く来こが酒へあらうあけうあり出ふ買うこ来こう
どうごうく、南「イヤ実正ふ居ら様人様ごゼ 東「モウ日の
こうこ方ごうふ一人も居れ人こと食ごいうれ人こうとて
待へじやアれへう 南「左様ョうく元人ごあごんおせ
うこう違うく実人こうあうを見まふ〜 東「コウこう
こ所へ出ふ遠のハれへぜ行があんおごうこうでも
明けるして違へ出ることでもあうあへ 西「こうサうく
南「イヤ待れへようご待て居ごもどうこうこうご 南「三人上ノ十

帰うて来こあをおどうして出ふどうご 東「こうへまうごう
行ぞう旅向ごあうこもあるものごうウ 西「エ知ごうふおうれへう
重れての用心異見のこうふ元人ごが盗人のこうこうご一番
おうこうこうへうれへう 南「ちう〜強盗の出ぜ
ごう 東「ナニう〜狂言の仕持ごするうへうのうおうれへう
紙一枚でも元へ出ふ 南「ふうれごおどうして元へ出ふう
後用心をする気ふ有ごうごさうう左様ごう元へうんの
たうごあのあうもあんまうこう平気ごううあびやうして出ふ

東へよろづ〳〵ア彩するゴいくア扇の中の雜物を付種
鋪へ立ち〳〵セ　西へすごいくことゴあるやに付るを番組
長ホつろことみ引の脇橋と金ゴあだちのたゴ力ゴあるをゴ
東へこをろ〳〵　西へそををでろ〳〵そのろを橋く川ゴ長濱
天空猛ゴ清の姿形で　ま下の美元大勢ゴ正本ゴ　南へ
ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ
形ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ
古風ゴををのゴ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ

ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ
ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ
ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ
ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ
ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ　ゴ中ホ

くぶひ[illegible]をちぶめるヨセを[illegible]ぶすこらりなやく やら
うーねえ 「サテく 知其人しねえが顔ハぶへちとう 西「そと
らふぬうるうぶめるうんゝ先刻墨田川の堤で貰うと来と
此服うーくうりゝけそそで知のきの表ゝるがいぜまるで
成田屋ゝるうゝゝるとと食を関元てハいうねえぜ 東「まるで知る
ちとうゝるぶ此連中ハめるうめゝ 元「サテぎんぢやうふ今ゝの五
更内ちうて表をたるを二人ハすゝの浅草ぶぶてう
腹くぶくくと知見事やぶぜ 東「そつまらねえ藤りを

するゝ百まるとおうけとるくべ世うぶんでかくくていく
ちゝくくとらくハうくちゝくゝト元人揚ゝ次の間人ちゝび
酒ちくく鯖ぶとも知くぶでうゝく結ぶうゝ結ハりるすす
家内ハ入ゝを此舞を見くぶうりせゝぶ毎ぶうる顔ひ
ハそぶゝるとをるとをもあれば知るうれぶおぶうゝれ顔
ハく 発「コヤとーねくぶを[illegible]ぶうゝ酒義ぶうゝ
ちゝのとを知ちうくぶ「ゝくまを居やゝぶるちぶゝト二
人ぶつぶゝくうくうゝとぶうゝと実知ぶ刀の光ゝを芙蓉

時のこと　ものまえ　元来ものまえ
清ものの　ハ「キャアト」両個ハ屏風つきガタくとうえ
ひに東西南北ハ手ものくうるとかのうこうらねあるこのあ
東「サノ」蓋の仕たてうを今ぐねんぞ　南「両人ものふ動きあ
ぐうあ　ハ「ハアイく　東「おぼく　真ものこ戻ってきまくこと
いくで隠ます　残りの者ものも西ものの陽あ光帝ド王ハ来布
異類　美形のあるきうあるあ　ゆく清ものくを引のうげ
のうくとうあり町屋とう遠ハ別義の家を間屋く

たうまう家ものまえ二人ハ今きうくうあ気味ものくうあ来ハさうら
あり畜の根もあハぐぐまんをすまえ　ものくうえ　ものあを
ぐあくちぐく屋うあ　ハ「サノ」ぶうく世ぐと金のあうとあを
きうくねうを　笑「ハイ」あまんきん方ハ伝の世用ぐあので
うきうまうう　東「ヤノ」ぐかけうあ新いのくうハ来ぐと紙
まうぐうぐうきうあうぐハ　笑「ヘエ」あうとみきうあでどうあまうう
ハ「ヒ」　笑「ヒ」関く歩法いくまくまくハまくはぐ新ふ来蓑
ふ生活きものぐうく吉田のおれきあもうんとういハ

花鉢

北方の中男代ってもつくるのうをでんじまうと
うねびようる雨ぐ身代を貧ハおろうつぐ〜ゆもるるめう
東「そーてきと押延と関くなを安拡おとぬう〜とのご
答「ハイそをハいもやくまうるものどざるませんうう東ヤア
代奴おぶるれうとを金のおをを知ってせびハ貧を掴るの
生利益サア 観念ろ 答「ようく 西「ア大きる摩の松
おうなぐるナ 答「ハイくいのすーません〜コレ北八吐月使を
おの 恵くを質ろと弱ってぶゆうろそれでも出ってあげろナ

「ようくするひとをいのぐ湿絶を曲て茶を買く
せくそのえあの四方まるくまてくはれんおまどろいく
西の庫ご 南「ヤイくとのうらハ義牛とやうざなれのうれの
ドモ「シシ四百でも 北「三百でものとくび
用結ハるうえ
くん 「ヤ〜ア グエエ 浴「ア大きる摩の〜ちおんをさら
ちまるるまるえ関人まるとれ交がるるみどりまるれ南
盗人 西「ナニ行ごと 答「ヘイイエおどろがうるさうるぶお送入り
ようても行やまるくまる物がるうくと神利をさまる

まだと野ぐ金をうるふ那金ゴロフにどざりませうか
「ハイおどろかうさま人やいのげまして私ハ金舞とての家の
おかでハどざりませんおまへ人さんがらの者でハびらうな
おとこのゝをいてゝまたようでどざいますが私ハもうゝ此
間食事をふおかなさるさのでどざりまして正弦さん
の男ハのとゝびおとゝるさいませそのえ勢ゝ七ゝ仕義
をさるてゝも世の金ハさらゝく横ゝまハのゝまいません
ろうと私をゞおゝ助けるさるゝ「そゞら

がうめ人命より外ゝまハ何もも持もあれ人ゝなせふそゝて付も拵
西人びろうゞのおゞ家ゞをつけやゝゞる 東「イヤハヤあき
まさ西ゝゞいのゝゝいこの拵ゝでハ実ふ何もどざりま
ゝまれ世ゝくのゝたらの世おゝ西「ゝゝてみるゝのゝをゝ
ませうゝ 元「あゝゝをのゝびゝゝゝけゝみやゝゝ両人ともゝゝて
あゝ人サ 繁「ゝやゝく私ハ腫物が出来まゝて苦のゝゝらゞ
よどれきゝくあるまゝて 元九「イヤおまハそのよどれさゝ苦のゝが
ゝまきゞ 繁「ゝやゝくゝるひのゝゞおゝ好でどざりまして 北八「どゝ

ぐうと貧乏神ゐすうまてこのハいけれんあご　東「ぐうどう
まこと　中八「ナニよろ〳〵いものでごぞうまし　元「サア〳〵脱く
絵中八「ハイ〳〵ゑんまこぞぶろ〳〵　西「遊廓でハあるゑん〳〵　押
込が金備ぞ消るものゑん　絵「どあっぷもでごぞうまし　小八
マアゑゑん先へぬげる　小八「おらアれつがあるゑゑ浅ゐ〳〵く
ゑんれんまこと三日絶穀でもするとゑゑ　絵「その見苦
ゑの面ぐまことゑうそうをしてしまいく清〳〵小豆の自
其内在解のようぐらゑう　ゑゑ「イヤこのゑらア酒屋ゐう盗人を

ゑる藤ゑあをるサアく　ぬげ〳〵ト一同ゐ　ゑゑこのゐ
ゐ裸ゑすまバぶる〳〵ふゑゑ　絵「ゑそものゑゐ裏
へ干ゑく　ゑゑこと寸天もあげませうト墓ゐの方へ入ゆて
接ゐ　弱せ〳〵ゑみぐらひの底を茅ゆゑ　ぐゑん〳〵ゑゑき
たそ　絵「ぐうぐう〳〵ト　ゑゑやく　中ゑ　南鄙　本ゑ　西ゑ
ゑぐゐ　ゑゑ「コレサく　おゐゑ達ごョ　ぐ
ゑ　ゑゑ「ナレサ　絵「ゑんおゐ
までもうまゐれんぐうぐう〳〵
ら達ご〳〵トゐまてゑゑ　ゑゑ「ゑんごおゐ達

ゴラもんちやまぢ　ゴラいめんまつ　ゴラ「ゴラ〳〵〳〵　ゴラ「ゴラんの
あつ〳〵もねんおがくみるる　史「おあらふまつそぢめらら
あめんさちぢを男川て居さアナ　ゴラ「まけあつそだろり
いつくみるぜそれでもぶるくふるんぢやうれろ　史「ナレ
さうして見せねんそれば　あめんさちの怖さんぢ　ちねんうちョ
たをんの盗賊ゐしろ　伊もとらまるものふるゐ〳〵　おそ
ろしくもねんけろるみるるとうぐとうくて　長の旅ぢ出まる
めの本貫海ろぞ真の天物ゐ出金そせ家あぢろうぬ

男ぢ　ゴラ「ホンニさ時へひとつちぢみゐ　あつこぢろぢゃう　今の
ゴ「ぬけゐ　さらぢの已も　生傷をねうまてこのまくしの　東サア
ぢ〳〵まぢとひつくする　奴ぢめるるめろ　史「ナニぢ〳〵まぢ
うぜまんだうよりろ　西「ソンナまづい地ひろうさやく一盃さ
やちろそう　ゴラ「ゴラぢよりろのくト　大騒ぢ　ちぢ
ゴラ「ゴラゐ　質く　茶ちやちら　火をおとぢ　やちよりろ　ゐッ
つまをもう〳〵　ちやく〳〵　居ちんび　酒ちるまをちぢゐけまぢ
例のどやく　ゴラちゃう　ちとあぢ

とざゝせばあとそびよ方の志ゝ浪を
俳優ふる代の志げ事さ
ト名ゝつく盃をあぐらしまんくふさぐの戯言を
ゆしちらゝ金舎ゝくとそ見ふ久是

滑稽道中膝栗毛續々三編上終